

ウシの仲間

多くの国々が切手を用いた郵便制度を採用し、郵便網が世界に広がってゆくと、切手は国を紹介したり、外貨を獲得したりするための重要なコレクションアイテムという性格を帯びるようになっていきます。風景などの絵画的な図案の中にウシが描かれた準動物切手が登場し、やがてウシそのものの姿が描かれた純動物切手が発行されるようになります。家畜牛の祖先種であるオーロックスは、1627年にポーランドの最後の一頭を最後に絶滅しているため、純動物切手として描かれることはありませんでしたが、現在も生息するウシの近縁野生種や家畜は数多くの国の切手に登場します。

牛の博物館で広義に「ウシ」として取り扱っている動物は、ウシ属、バイソン属、アジアスイギュウ属（アノア属を分ける説もある。）アフリカスイギュウ属の4つのグループです。これらの仲間は、体が大きく、尾は細長く先がふさふさし、鼻鏡^{びきょう}が大きく、左右に分かれていません。角は雄にも雌にもあるなどいくつかの共通の特徴を持っています。

ウシの仲間は、狩猟や生息環境の破壊によって絶滅が心配される一方で、家畜化されたり、ウシとの属間雑種や種間雑種の作出に用いられたりするなど人間に利用されている種が多く見られます。この「人との関わり」がウシの仲間の生き物としての魅力のひとつといえるでしょう。